

# 社会運動へ道定める

## 四国の文学

い、舞台は ⑤

鳴門市で幼少を過ごした社会運動家、賀川豊彦(1888-1960年)はさまざま顔を持つ。牧師、神戸の貧民街での救済活動家、生活協同組合の創始者、労働運動家、ノーベル文

学、平和賞候補……。出世作となった小説『死線を越えて』は、1920(大正9)年に出版されると上中下巻計で400万部を超えたというベストセラーだ。昨年11月、小説に描かれた徳島の場面をたどる催しがあり、約25人の賀川ファンらと歩いた。

古川の渡しに來たのが八時。川幅三町に架っている長い橋を渡る。淋しい。何だか風に乘っ

ている様だ。『古川の渡し』は吉野川に架かる木橋と舟橋だったが、昭和の初めに鉄筋コンクリートの吉野川橋になった。今は車の往来が激しく、橋を渡っても淋しさや風に乗った感じは味わえない。佐古の方まで散歩して、日も全く暮れたから、東新町をとぼとぼ帰って來ていた。一丁目の角へ來ると、大勢の人が軒に立って、讃美歌の声が中から聞える。

東京のキリスト教の学校に通



④「死線を越えて」の道を歩く催しで徳島市内から賀川豊彦の郷里を訪ね、さらに鳴門市賀川豊彦記念館までを歩いた⑤明治から戦後まで活躍した社会運動家・賀川豊彦。故郷で静かに眠る一いずれも鳴門市大麻町東馬詰



37歳ごろの賀川豊彦(賀川豊彦記念松沢資料館提供)

「死線を越えて」 社会運動家の賀川豊彦の自伝的小説。東京の学生だった主人公が郷里に戻り父に反発。父の死後、キリスト教の信仰が厚くなり、神戸の貧民街に住み込んで伝道と貧民救済活動をする。やがて、貧民街の住人らを中心に労働争議が起きて主人公も関わってゆく。PHP研究所から2009年に復刻版が刊行された。

う主人公は徳島の父から仕送りを止められ、義母の住む郷里の鳴門市大麻町東馬詰の家に戻る。徳島で主人公は封建的な父にことごとく反発する一方、哲学や恋愛、将来への不安など当時の青年らしい悩みをあれこれ考える。

と賀川が通った通町の教会は60年代に移転し、小説の講義所も今はないという。賀川の郷里、東馬詰を訪ねた。旧吉野川の川岸で田畑が広がり、北に阿讃山地、南は眉山を見通せる。一緒に歩いたNPO法人賀川豊彦記念・鳴門友愛会理事の岡田健一さん(68)が語る。「賀川は教育に力を入れた。自然に触れて自然の原理がうまくなっていくことを学べと説いた」。自然に恵まれた徳島で育ったことがその原点。「賀川先生墓」と記された墓は今も水田に囲まれている。その墓から西に400m。賀川の足跡を展示する鳴門市賀川豊彦記念館がある。館長の田辺健二さん(72)は「徳島が舞台の小説の前半は賀川が19歳のころに書きためた別の創作小説が元」と明かす。当時、流行した近代的自我の目覚めや父への反抗がテーマで、作家への野心がみえるという。21歳で神戸の貧民街で救済活動を始め、26歳で米国に留学。帰国して貧困を防ぐには労働者の団結が必要と考えた。貧民街の聖者として有名になった32歳ごろに雑誌に小説の連載が始まり、好評のため貧民街以降の活動を書き加えた。「十数年を経て書いた後半は、日本の貧困をどう防ぐかがテーマ。自己を確立し、自分の進むべき道を定めている」と田辺さんはいう。作家への淡い夢を持った賀川青年が、世界的な社会運動家となっていく過程で生まれた作品。そう読み取ると一層面白く読める。(鈴木芳美)